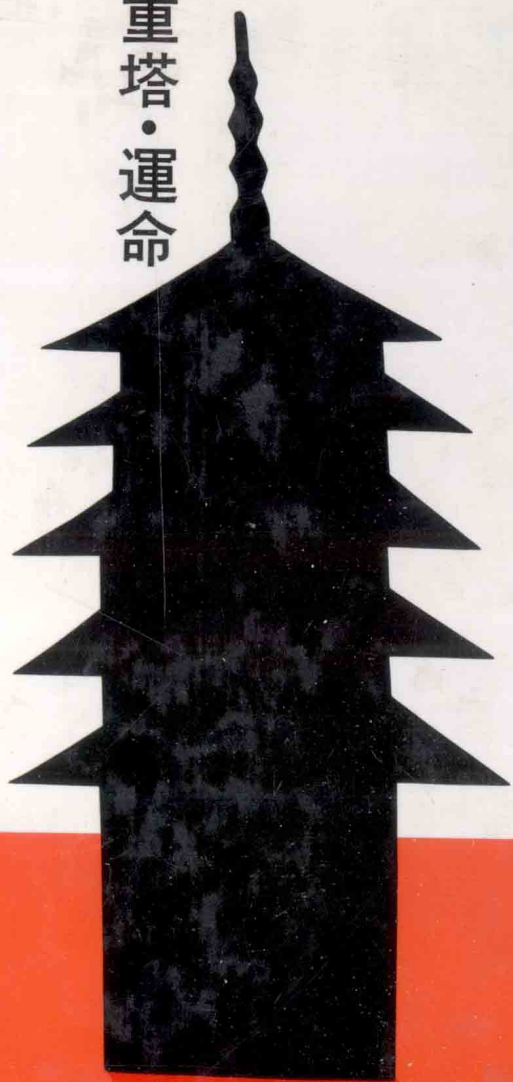


五重塔・運命

幸田露伴



五重塔・運命

幸田露伴

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進 編 日本の文学 3

五重塔・運命

著 者 幸田露伴

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和六十年二月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森時人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四―七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二一（代）

製作 東京連合印刷株式会社

印刷 図書印刷株式会社

函・表紙印刷 共同印刷株式会社

目次

五重塔

1

風流仏

141

運命

235

注

露伴初期の代表作

前田 愛

475 425

挿絵一葉（五重塔）

富岡永洗

挿絵二葉（風流仏）

（不明）

五 重 塔

其 一

木理美しき機胴、縁にはわざと赤檜を用いたる岩畳作りの長火鉢に對いて話
し敵もなく唯一人、少しは淋しそうに坐り居る三十前後の女、男のように立派
な眉を何日掃いしか剃ったる痕の青々と、見る眼も覚むべき雨後の山の色を留
めて翠の匂い一トしお床しく、鼻筋つんと通り眼尻キリ、と上り、洗い髪をぐ
る／＼と酷く丸めて引裂紙をあしらいに一本簪でぐいと留めを刺した色気無の
様はつくれど、憎いほど烏黒にて艶ある髪の一ト綜二綜後れ乱れて、浅黒
いながら渋氣の抜けたる顔にかゝれる趣きは、年増嫌いでも褒めずには置かれ

まじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるにと好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭では為べきに、さりとて外見を捨てゝ堅義を自慢にした身の装り方、柄の選択こそ野暮ならね、高が二子の綿入れに縹子襟かけたを着て、何所に紅くさいところもなく、引ッ掛けたねんねこばかりは往時何なりしやら疎い縹の糸織なれど、此とて幾度か水を潜つて来た奴なるべし。今しも台所にては下婢が器物洗う音ばかりして家内静かに、他には人ある様子もなく、何心なくいたずらに黒文字を舌端で廻り躍らせなどして居し女、ぷつりと其を噛み切つてぷいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨きおとしを拭き、銅壺の蓋まで奇麗にして、*なんぶ あられ おおてつびん ちやんと *せきでんさままいさて南部霰地の大鉄瓶を正然かけし後、石尊様詣りのついでに箱根へ寄つて来しものが姉御へ御土産と呉れたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を右の手に持た驚甲管の煙管で引き寄せ、長閑に一服吹うて線香の烟るように緩々と烟り

を噴き出し、思わず知らず太息吐いて、多分は良人の手に入るであろうが、憎いのっそりめが対うへ廻り、去年使うてやった恩も忘れ、上人様に胡麻摺り込んで、強て此度の仕事を為うと身の分も知らずに願いを上げたとやら、清吉の話しでは、上人様に依怙最良の御情はあつても名さえ響かぬのっそりに大切に仕事を任せらるゝ事は、檀家方の手前寄進者方の手前も難しかろうなれば大丈夫此方に命けらるゝに極ったこと、よしまたのっそりに命けらるればとて彼奴に出来る仕事でもなく、彼奴の下に立つて働く者もあるまいなれば見事出来し損ずるは眼に見えたこととのよしなれど、早く良人が愈々御用命かつたと笑い顔して帰つて来られゝばよい、類の少い仕事だけに、是非為て見たい受け合つて見たい慾徳は何でも関わぬ、谷中感応寺の五重塔は川越の源太が作り居った、嗚呼よく出来した感心なと云われて見たいと面白がつて、何日になく職業に氣のはずみを打って居らるゝに、若し此仕事を他に奪られたら何のように腹を立

てらるゝか肝癢かんしゃくを起さるゝか知れず、それも道理であつて見れば傍わきから妾めかけの慰
めようも無い訳、嗚呼ああ何にせよ目出度う早く歸つて来られゝばよいと、口には
出さねど女房氣質かたぎ、今朝背面うしろから我が縫いし羽織打ち掛けさせて出したる男の
上を氣遣うところへ表の骨太格子手ほねぶとこうしあらく開けて、姉御、兄貴は、なに感応寺
へ、仕方が無い、それでは姉御に、済みませんが御頼おたのみ申します、つい昨晚ゆうべ酔
ましてと後は云わず異な手つきをして話せば、眉頭まゆがしらに皺しわをよせて笑いながら、
仕方のないも無いもの、少し締まるがよいと、云い／＼立って幾干いくちかの金を渡
せば其それをもつて門口かどぐちに出で、何やら諄々くどくど押問答せし末此方こなたに來りて、拳骨げんこつで額ひたい
を抑え、何も済みませんでした、ありがとうござりますると無骨な礼を為したる
も可笑おかし。

其 二

火は別にとらぬから此方へ寄るがよいと云いながら、重げに鉄瓶を取り下して、属輩にも如才なく愛嬌を汲んで与る桜湯一杯、心に花のある待遇は口に言葉の仇繁きより懐かしきに、悪い請求をさえすらりと聴て呉れし上、胸に蟠屈りなく淡然と平日のごとく仕做されては、清吉却って心羞かしく、何やら魂魄の底の方がむず痒いように覺えられ、茶碗取る手もおず／＼として進みかぬるばかり、済みませぬという辞誼を二度ほど繰返せし後漸く乾き切ったる舌を湿す間もあらせず、今頃の帰りとは余り可愛がられ過ぎたの、ホ、遊ぶはよけれど職業の間を欠いて母親に心配さするようでは男振が悪いではないか清吉、汝は此頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済むと直に根岸の御別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るではないか、良人のも遊ぶは随分好で汝達の先に立って

騒ぐは毎々なれど職業を粗略にするは大の嫌い、今若し汝の顔でも見たらば又例の青筋を立つるに定つて居るを知らぬでもあるまいに、さあ少し遅くはなつたれど母親の持病が起つたとか何とか方便は幾干でもつくべし、早う根岸へ行くがよい、五三様も了つた人なれば一日をふてゝ怠惰ぬに免じて、見透かしても旦那の前は庇護うて呉るゝであらう、おゝ朝飯がまだらしい、三や何でもよいほどに御膳を其方へこしらえよ、湯豆腐に蛤鍋とは行かぬが新漬に煮豆でも構わぬはのう、二三杯かつこんで直と仕事に走りやれ走りやれ、ホ、睡くても昨夜をおもえば堪忍の成るうに精を惜むな辛防せよ、よいわ弁当も松に持たせて遣るわと、苦くはなけれど効驗ある薬の行きとどいた意見に、汗を出して身の不始末を慚ずる正直者の清吉。姉御、では御厄介になつて、直に仕事に突走りますと、驚掴みにした手拭で額拭きゝ勝手の方に立つたかとおもえば、既さらゝさらつと口の中へ打込む如く茶漬飯五六杯、早くも食うて了つて出て

來り、左様なら行つてまいりますと、肩ぐるみに頭をついと一ツ下げて煙草管を収め、壺屋の煙草入三尺帯にさすがは氣早き江戸ッ子氣質、草履つかけ門口出ずる、途端に今まで黙って居たりし女は急に呼びとめて、此二三日のっそり奴に逢うたかと石から飛んで火の出し如く声を迸らし問いかくれば、清吉ふりむいて、逢いました逢いました、しかも昨日御殿坂で例ののっそりがひとしおのっそりと、往生した鶏のようにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るを見かけましたが、今度此方の棟梁の対岸に立つて、のっそりの癖に及びも無い望みをかけ、大丈夫ではあるものゝ幾干か棟梁にも姉御にも心配をさせる其面が憎くって面が憎くって堪りませねば、やいのっそりめと頭から毒を浴びせて呉れましたに、彼奴の事故氣がつかず、やいのっそりめ、のっそりめと三度めには傍へ行つて大声で怒鳴って遣りましたれば漸く吃驚して梟に似た眼で私の顔を見詰め、あゝ清吉あーにーいかと寢惚声の挨拶、やい、汝は大分好い男児

になったの、紺屋*こうやの干場ほしばへ夢にでも上ったか大層高いものを立てたがって感応かんのう寺じの和尚おしやうさま様に胡麻ごまを摺り込むという話したが、其それは正氣せいぎの沙汰さたか寝惚ねぼけてかと、冷語ひやかしを蕎向まつこうから与やったところ、ハ、姉御あねご、愚鈍うすのろい奴やつというものは正直ではありませんか、何と返事をするかとおもえば、我わしも随分骨を折って胡麻は摺って居るが源太親方を対岸むこうに立てゝ居るので何も胡麻が摺りづらくて困る、親方がのっそり汝きさま為やつて見ろよと譲って呉れゝば好いけれども一の馬鹿ばかに虫の好い答え、ハ、憶おもい出しても心配相に大真面目おおまじめくさく云った其面そのつらが可笑おかしくて堪りませぬ、余り可笑おかしいので憎氣にくつけも無くなり、篋べらぼう棒めと云い捨てに別れましたが。其限りそれきか。然へい。左様そうかえ、さあ遅くなる、関かまわずに行くがよい。左様さようならと清吉おのは自己が仕事におもむきける後はひとりで物思い、戸外おもてでは無心の兒童達こどもたちが独楽戦こまあての遊びに声々喧しく、一人殺しにんごろじや二人殺しにんごろじや、醜態ささまを見よ讐かたきをとつたぞと号わめきちらす。おもえばこれも順々がたき競争の世の状さまなり。

其 三

世に榮え富める人々は初霜月の更衣も何の苦慮なく、紬に糸織に自己が好き
好きの衣着きぬて寒さに向う貧者の心配も知らず、やれ炉*開きじや、やれ口切じや、
それに間に合うよう是非とも取り急いで茶室成就しあげ待合の庇廂繕えよ、夜半の
むら時雨しぐれも一服やりながらで無うては面白く窓撲うつ音を聞き難しとの贅沢ぜいたくい
て、木枯こがらし凄しく鐘の音氷るようになって来る辛き冬をば、愉快こころよいものかなんぞに
心得らるれど、其茶室そのの床板とこいた削りに鉋礪ぐ手の冷えわたり、其庇廂ひさしの大和がき
結いに吹きさらされて疝癰せんしやくも起すことある職人風情は、何ほどの悪い業ごうを前の
世に為し置きて同じ時候に他とは違い悩め困くるしませらるゝものぞや、取り分け職
人仲間うちの中でも世才に疎く心好きよ吾夫、腕は源太親方さえ去年いろ／＼世話し
て下されし節おりに立派なものじやと賞められし程確実なれど、寛濶おおようの氣質故に仕

事も取り脱り勝で、好事は毎々他に奪られ、年中嬉しからぬ生活かたに日を送り月を迎うる味気無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴った股引ばかり我が夫に穿かせ置くこと婦女の身としては他人の見る眼も羞ずかしけれど、何にも彼も貧が為する不如意に是非のなく、今縫う猪之が綿入れも洗い曝した松坂縞、丹誠一つで着させても着させ栄えなきばかりでなく見とも無いほど針目勝ち、それを先刻は頑是ない幼心といいながら、母様其衣は誰がのじゃ、小いからは我の衣服か、嬉しいのうと悦んで其儘戸外へ駈け出し、珍らしゆう暖い天氣に浮かれて小竿持ち、空に飛び交う赤蜻蛉を撲いて取ろうと何処の町まで行ったやら、嗚呼考え込めば裁縫も厭気になって来る、せめて腕の半分も吾夫の氣心が働いて呉れたならば斯も貧乏は為まいに、技倆はあつても宝の持ち腐れの俗諺の通り、何日其手腕の顯れて万人の眼に止まると云うことの目的もないたゞき大工穴鑿り大工、のっそりという忌々しい譚名さえ負せられて同業中にも軽し

めらるゝ齒痒はがゆさ恨めしき、蔭かげでやきもきと妾わたしが思うには似ず平氣なが憎らしい程なりしが、今度はまた何どうした事か感応寺かんのうじに五重塔の建つという事聞くや否や急にむらゝと其仕事を是非す為る氣になつて、恩のある親方様が望まるゝをも関わかまず胴慾どうよくに此様な身代しんだいの身に引き受きようとは、些ちとえら過ぎると連添つれそう妾わたしでさえ思うものを他人は何んと噂うわさするであらう、ましてや親方様は定めし憎いのつそりめと怒つてござらう、お吉様は猶なお更さら義理知らずの奴めと恨んでござらう、今日は大抵何方どちらにか、任すと一言上人様ひとことしやうにんさまの御定おきめなさる筈はずとて今朝出て行かれしが未だ歸られず、何か今度の仕事だけは、彼程吾夫あれほどうちのひとは望んで居らるゝとも此方こちらは分に應ぜず親方には義理もあり旁かたがた親方の方に上人様の任さるればよいと思うような氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒りもなさらずば吾夫うちのひとに為させて見事成就じきじゆさせたいような氣持もする、えゝ氣の揉もめる、何どうなる事か、到底良人とてももうちには御任おまかせなさるまいが若もしもいよゝ吾夫うちのひとの為る事になつたら